

令和3年度 第11回 昭島市社会教育委員会会議・要点録

開催日時／会 場 令和4年2月24日（木）午後7時00分～8時45分 602会議室+Web会議

出席者 谷部議長、稲垣委員、小原委員、齋藤委員、指田委員、二ノ宮リム委員、
信國委員、吉川委員、吉村委員

欠席者 松本副議長

事務局 川崎社会教育係長、来住野社会教育主事

1 開 会

＜配付資料＞

資料1 昭島市教育委員会の教育目標

資料2 建議「対話から地域力を育む社会教育」目次（案）について

資料3 市民のニーズを活かす・つなげる あきしま会議について

- ・昭島市月間行事予定表3月（メール配信のみ）
- ・あきしま公民館だより No.208
- ・昭島市郷土資料室だより 鯨 Vol.4

2 報 告

（1） 昭島市教育委員会の教育目標について（資料1）

※資料について、事務局より説明

（2） 令和3年度関東甲信越静社会教育研究大会東京大会実行委員会第13回実行委員会について（2/21）

議 長 最後の東京大会実行委員会が開催された。動画の再生回数についての報告があった。第1部（アトラクション、開会行事、基調講演）は463回、第2部（トークセッション、閉会行事）は233回。現在大会報告書を作成しており、3月1日から第52回関東甲信越静社会教育研究大会東京大会ホームページで概要版をダウンロードできるようにする。同ホームページは、4月23日（土）に開催される令和4年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会定期総会後閉鎖することになっている。今度東京大会が開催されるのは約10年後だと思われるが、今回の東京大会に係る記録を残してほしい旨申し入れた。※第52回関東甲信越静社会教育研究大会東京大会ホームページ

<https://syakaiky.wixsite.com/website>

（3） 東京都市町村社会教育委員連絡協議会第5回役員会・第2回理事会について（2/22）

議 長 今年度の全国社会教育委員連合総会関係（第1回～3回）、交流大会の報告と、令和4年度の定期総会議案書案について協議を行った。特に、定期総会議案書案については、後程ご確認いただき、ご意見があれば事務局へお寄せいただきたい。今度の総会では、東京都市町村社会教育委員連絡協議会表彰として、昭島市から3名が表彰されることに

なっている。

(4) その他

委員 来年度の小学生国内交流事業に向けて、今年度の運営委員を対象に、指導員の確保に向けたアンケート調査があった。

3 協 議

(1) 第 31 期社会教育委員会議建議「対話から地域力を育む社会教育」について（資料 2）

議長 第 30 期では活動報告だったので、3 年以上にわたる我々の活動から得られることを建議として取りまとめていきたい。コロナによって対面による交流が困難になったが、ICT の活用ということで、様々な場面でかなりオンライン会議が普及した。今では小・中学生がタブレットを使うなどオンライン教育が始まっており、あと 10 年もすればそれが当たり前の世界になるであろう。現在は特にシニア世代に ICT の苦手意識があり、学習意欲のある方にとって、今の時代に遅れてしまいそうな方たちをどうすればよいのか課題ではないかと感じている。あきしま会議そのものをリモートでという試みは先進的だと思うが、まだ浸透しているとは言えない状況だと思う。スムーズに参加してもらうにはどうしたらよいのかということを考えることも必要だ。リモート会議をすることにより、例えば先日の東京大会などは、これまでは参加者が社会教育委員のみであったものが、録画配信などを試みたことにより、例えば私の場合だが、その URL を 20～30 人くらい友人・知人に伝えたところ、これまで社会教育には無縁であった方たちにも見てもらうことができ、社会教育の広がりを実感した。

委員 第 30 期の活動の記録を作成していたころは、ICT の活用についてはコロナで継続が難しくなってきた活動など、今までやってきたことをつなぐための手段としてとらえ、対面に戻していくことを見据えていたかと思うが、活動をなくさないで続けていく為の手段だった。ただ、この 2 年間はオンラインを対面の代替としてではなく、オンラインで見えてきたこと、どのように進めていくかについて書いていけるとよいのではないかな。

委員 ICT の問題は、今までの社会教育委員の会議でも、あきしま会議でもかなり使われる場面が多くなってきた。ただ、取り残さない人を出すためには、その人たちをどう扱うかが課題だと思う。多くの高齢者にとっては別世界のような感じだろうし、そのあたりも含めて前向きにどう対処したらよいという提言をしたい。

委員 ICT を使うときに、学校に来られない場合に授業をしているが、タブレットならではの授業をしたい。東京と北海道を結ぶなどできたらよいと思うし、ふだん対面で取り組んでいる地域との交流、例えば、栄養士さんから拝島ネギについて学ぶ、農園見学、ごみ対策課、校区内の企業見学など、ICT を使って交流できないか、これからの時代そういうことができるのではないかな。

委員 ICT、リモートでの対話ということになるかと思うが大きく 2 つイメージしていて①格差の解消：保護者会を配信で行うことで、保護者会を共有する。その様子を録画して、期間限定で載せることで、当日その時間参加できなかった方も説明を受けることができるなど、個々人の格差を解消できてきていると思う、②使い分け。対面とリモー

トが同じであっては意味がない。学級閉鎖になった場合、担任と子供たちが学活などオンラインでつながってクラス運営ができるなど、教室で子供たちがグループで話し合うときの違い、熱量、体温を感じながら話し合う良さを、大人のみならず子どもたちも実感しているのが実態。オンラインでは遠隔で話し合いができるのが大きなメリットである一方、生の話し合いのよさも改めて再認識されていると思うので、その使い分けが必要かと思う。対話ということでは、学校で行っている道徳授業地区公開講座のあと、教員、保護者、地域の方で話し合う場があるが、とても貴重な場で、それぞれの立場で子供たちにどうかかわればという対話がなされるので、多く参加してほしいと思っている。そこをリモートでやったらどんなことができるのだろうと考えている。

委員 コロナという誰もが想像もしなかったネガティブな事象から、その中でどう人々が生きていくか、どうコミュニケーションを取っていくかということではじまった試みで、社会教育委員の人たちでもオンラインでの会議に戸惑った方もいるかと思うが、それがある意味乗り越え、こうして会議を継続できているというのはすごいことだ。すぐにすべての人がこういうことでコミュニケーションが取れるのだと思わなくてよいが、少しずつこういう選択もあり、それは高齢者だと無理だということではないはずで、高齢者でスマホを持っている人もいるわけだし、いざとなったら使える人もいるのだろうが、ややハードルが高いというところではないか。でも、先日話題に出た分身ロボット OriHime などを活用することで、障害のある人も、高齢者も、小さなお子さんを抱えた人、濃厚接触者や感染してしまって外に出られなくなってしまった人でもオンラインでのコミュニケーションが広く可能になり、便利だとなれば少しずつ変わってくると思う。先日、発達支援の講座を受けたが、その講座はもともと対面の講座として予定されており、自分には時間的に参加できない状況だった。急遽、まん延防止措置の延長によりオンラインでの開催になったおかげで、自分は参加することができた。講座の担当者は何度も「オンラインになってしまってすみません」とおっしゃっていたが、自分にとってはオンラインだったからこそ、聞きたい講座に参加できたのでとてもよかった。いろいろな考え方があるが、このネガティブな社会的な問題をきっかけに何かが変わり、社会が変わり、今までもあったが使わずにすんでいたコミュニケーションのツールを使ってみたら、だれにとってもこれまでできなかったコミュニケーションが取れるようになってきたということだと思う。私はアメリカで、日系の NPO 団体の「高齢者のためのコンピュータークラス」を担当したことがある。その時に感じたのは、みなさんコミュニケーションを取りたい。アメリカにいる人は日本にいる友人や親戚とコミュニケーションを取りたいのだが、時差などもありなかなか難しい。その当時はまだメールが主流だったので、パソコンを使ってメールについて学ぶことによって時間を気にすることなくやり取りができるようになった。人とコミュニケーションを取りたくても、できないと思っている人たちも、学ぶ機会があればできるのではないだろうか。アプローチの仕方だと思う。一人ひとりのニーズによって、オンラインやコミュニケーションツールを学びたいと思う機会が増えてくると思う。

委員 小学生国内交流事業の作文集を拝見し、子供たちがオンラインで交流されたということがよくわかる。昨日、今上天皇が誕生日のお言葉の中で、SNS やオンライン等につい

て臨場感という言葉が使われていた。子供たちははじめにどうしたらよいかと緊張感をもって交流をスタートし、徐々にエキサイティングな交流になっていく様子がよくわかった。

委員 対話とは、表面的な交流ではなく、それぞれの人が自分の率直な感情や想いを対等な関係性の中で安心して出せる。それをもとに異なる価値観や立場、意見の人たちが、その話し合った内容をすり合わせて新しい道を切り開いていく、新しい何かを生み出していくことだと思う。対話を実現するときに大切なこととして、「誰もが参加できる」こと、「その中に対等な関係性ができる」ということもあるかと思う。オンライン、ICTの話が軸になっているが、オンラインが持つ「誰もが参加できる」「対等な関係性をつくる」というところの、良し悪しがある。良い面としては、これまで対面の場になかなか参加できなかった人ができるようになるということだ。対等な関係性という点でも、対面だと体の大きさや声の大きさ、座る場所などが対面だと左右されるが、オンラインだとそれらから自由になり対等に話ができるということもある。一方で、取り残される人が逆に出てしまう、また、発言のタイミングがつかみにくいか、お互いの反応がわかりにくくて遠慮してしまうなど、オンラインならではの率直にものを言い合う難しさもある。両面を認識しながら、良い面を活かしていくと同時に、対面の大切さもみなさん強く感じていることだと思うが、コロナによって公的な社会教育がリスクを鑑みて縮小された時に、民間の社会教育や市民活動に関わる人たちがやってくださったことは非常に大きかった。特に子供たちにとって対面で人に出会える場が失われるというのは致命的で、いくらオンラインでやり取りできるとはいっても、実際に生身でやり取りできる場がないとなかなか人間が生きていくうえで厳しい。その中で民間の人たちが何をしてくれたかということを社会教育としては大切にしなければならないと思う。みなさんが仰っていた遠隔の良さを活かして、他の地域の人や海外の人とやり取りができることはオンラインの価値だと思う。対話という視点で見ると、いろいろな価値観や考え方に触れていくことが対話の力を育てることにつながると思う。以前、コロナになる前の話だが、私の子供が小学生のころ、5か国をつなぐ環境教育プログラムに参加したことがある。小学生がマレーシア、台湾、日本、フィリピン、タイだったか、それぞれの国で合宿をしつつ、一日の何時間はオンラインでつながって何をしたかなどを紹介し合っていて、可能性があると思う。対話を育むとか、対話による社会教育ということを考える時にもオンラインの強みと弱み、対面の大切さというところ押さえる必要がある。

(2) 市民のニーズを活かす・つなげる あきしま会議について

議長 日程は6月12日(日)に開催を予定しているが、ご意見をお願いしたい。

委員 方法についてだが、基本的には対面が一番だと思うが、オンラインで参加したい人がいるのであれば、それに対応したい。オンラインの人がある程度いれば、オンラインの人どうしのグループということでもよいかと思う。

議長 今年度の東京都市町村社会教育委員連絡協議会ブロック研修会では、第4ブロックと第5ブロックの研修会にも参加した。どちらにおいてもコロナ禍でICTをどう活用していくかという話が出てきた。第5回目のあきしま会議(令和3年2月27日)でも、オ

ンラインでコロナ禍での活動の状況について現状を教えていただいた。あれから２年たっているのですが、その後 ICT を活用してどのように進めてこられたのかを聞いてみたいと思う。必ずしも ICT を使えばすべてうまくいくというわけではないが、試行錯誤しながら世の中の方向性としてはそういうものを活用していくという状況になりつつあるわけで、その中で取り残されているところがあるかもしれないし、積極的に活用することによって、活動が広がったなどあれば聞いてみたい。

事務局 市の施設に設置している団体活動紹介のファイルをここで更新したが、現在活動しているサークルや団体が激減していることがわかった。まだまだ活動を自粛されていることがわかる。

委員 子ども会、PTA、地区委員会など、活動再開のめどがほとんど立っていない。オンラインの活用ができている人もいるが、やっぱりオンラインができないところが社会教育の中にはたくさんあり、これからだんだんコロナが落ち着いていくことを前提とすると、それらをどう復活させていくか、盛り上げていくかが、難しいけれど大切だと思う。今の実態や、何があればよいのか、今後どうしていくかなど、オンラインに限らず、今の課題と今後について考える機会があるとよい。コロナでなくても衰退しつつあった地域のそうした活動が壊滅状態で、そういったものへの心配と、あきしま会議の次のステップとして、昭島をどうしていきたいか、それぞれの活動の中で昭島をよりよくしていくというところにどうつながっていけるかを具体的に話し合える機会があるとよいとも考える。

事務局 その部分を報告の資料の中に項目として盛り込むのか、ファシリテーターがグループの中で引き出していくのかを今後協議していただきたい。

議長 それでは、本日はこれで閉会とする。

次回

3月22日（火）午後7時より 204 会議室+Web 会議

4月28日（木）午後7時より 202 会議室+Web 会議